

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.44

平成24年8月31日

「第60回横浜能」を終えて

会長 藤本 圭佑

今年の5、6月は、記録づくめ話題の多い月となりました。

まず5月21日、関東では173年振りの「金環食」というこの上もない天体ショーに早朝東の空を仰ぎ見、また22日には、世界一の高さを誇る「東京スカイツリー」に20万人を超える人々が詰めかけるといふ、まさに日本中が沸きかえるフィーバーぶりでした。

翌6月2日の「第60回横浜能」は、天候にも恵まれ能楽堂に大勢の能楽愛好者にお出でいただき、還暦記念にふさわしく五流の能楽師総出演という特別企画で大成功裡に終えることができました。今回の横浜能は、一日の限られた時間のなかで、能(邯鄲・金春)・狂言(末広・大蔵)をはじめ、素謡(翁・喜多)・仕舞(三笑・観世)一調(笠之段・梅若)・独吟(熊野・金剛)・舞囃子(融・宝生)など能楽堂の皆さんの英知を結集した多様な上演形式と彩り豊かな演出に

より、楽しいひと時をもつことができました。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

また、昨年、偶然訪れた山形県鶴岡市黒川から「黒川能」のご案内を受けました。一度は是非訪れにはて直にこの目で見たいと願っていました。王祇祭の2月は雪深く馴れない私にはとても叶わぬことと思っていた矢先、6月3日と4日、鎌倉・建長寺から「黒川能」公演の案内をいただき、2日の「横浜能」から中一日おいた4日を申し込みました。

当日の建長寺龍王殿は、新緑の薫風に包まれ願ってもない勸能日和になりました。黒川能については、幽玄42号で紹介させていただきましたので記憶にある方もおありと思いますが、改めて紹介しますと、「黒川能」は500年前、京から庄内に伝わった能で、現存の五流の能と同系であるが、いずれの流派にも属さずいわゆる民族芸能として、地元春日神社への信仰を支えに、すべて農民の手によって生活の中で伝えられた貴重な文化財です。演目は、狂言「瓜盗人」能「八島」、黒川能上座の皆さんの出演でした。想像どおりプロの能楽師の能狂言とは違い、500年の昔を彷彿とさせる素朴さに溢れるものでした。

機会があれば現地で再会したいとの思いを強くしました。いずれにせよ能、狂言は過去から贈られた世界に誇れる日本の伝統芸能であり未来につなげようとの思いを一層強く感じた観能体験でありました。

4月23日には横浜能楽連盟総会が横浜市観光局・池尻文化振興部長及び芸術文化振興財団より来賓の臨席をいただくなかで開催され、役員改選の結果、私が会長(平成24、25年度)に再任されました。皆様の変わらぬご協力を賜りつつ、微力ではございますが誠心誠意「連盟」発展に努める所存です。

連盟報告(平成23年度後期)

企画事業担当 青山 圭佑

平成24年度総会

4月23日(月) 能楽堂2階レストランで開催、出席者270名(委任状提出者を含む)で会は成立した。(正会員483名)。

藤本会長挨拶に続いて、来賓祝辞があり、会長が議長となつて議事に入った。

議案の審議は、1号議案「平成23年度活動報告、決算報告、監査報告」。2号議案「平成24年度活動計画案、予算案」で原案通り承認された。

3号議案「役員の改選」は改選の為総会は一且休憩し、理事による会長、副会長、の互選を行い、会長に藤本氏、副会長に井實、吉田、馬場、の3氏が前期に引き続き互選された。

藤本会長を議長として総会が再開され、役員の交代による新体制が提案され、承認された。尚、藤本会長より、理事の交代が報告され、新任理事5氏、監事1氏が承認された。

新任理事は、喜多流栗野氏、金春流榊山氏、観世流長谷川氏、観世流篠原氏、観世流園田氏、新任監事に、観世流小田切氏、最後に、永年の御苦労に対し感謝の花が贈呈された。

第15回五流交流のつどい

宝生流 北見 康成

平成24年2月18日(土) 横浜能楽堂にて第15回「五流交流のつどい」が開催されました。

この日の出し物は素謡15番、連吟6番、仕舞7番、独吟1番、独鼓2番の計31番でした。

これらの出演者の合計は約300人となります。また今回はいつもの流派に加え、下懸宝生流からも出演頂きましたことは喜ばしいことです。進行時間も大変スムーズで、最後の素謡「鞍馬天狗」(宝生)は敢えて予定の範囲を広げ5分多く致しましたが、それでも終了予定時間の1分前に終了することが出来ました。各流派・社中に時間厳守の意識が徹底されている結果であると思いました。

前回の、第14回「五流交流のつどい」当番流派・喜多流が作成した電子化された運営記録と、更に昨年10月の第27回「横浜五流能楽大会」で金剛流が作成したパウチ加工の館内掲示物は当番流派の担当としても大変有難く助かりました。継続して活用したいと思っています。

「めぐり」は新たに18枚作成しました。これにより横浜能楽堂に保管する延べ枚数は83枚となりました。

弁当の予約申込数と駐車希望台数の取り纏めを各流派の責任者に一度お願いしました。集計結果、弁当は44個、弁当券は特に発行せず直接購入して頂きました。駐車希望台数は14台、能楽堂へは希望者の氏名と他流派・社中名を付した一覧表を提出し、特に駐車券は発行しませんでした。また、この弁当と駐車その他に、第二舞台の使用順序

を事前に取り決めておいたらどうかというご意見がありました。当日は仕舞で出演する社中間で話し合いされ、稽古順を決められたようです。

履物管理としては、今回は楽屋への上がり口にビニール袋を連盟本部から特別に用意し、心配の方には控え室まで持参して頂きました。特に問題はないようでした。

高見台を使用したいとの事前に2社中から要望がありました。実際は4・5社中が当日使用されました。現在、能楽堂には2台の高見台があるのみです。今後の使用が増える傾向にあり心配されます。

各流派の取り纏め責任者には大変ご協力をいただき有難うございました。何よりも会が無事盛會に終わりましたこと、深く感謝申し上げます。

~~~~~

### 謡曲の仲間づくりを

宝生流 新堀 豊彦

私は、まだ大学生であった頃から、能楽連盟のお手伝いをさせて頂いた。理由は簡単である。父が宝生流の代表者の一人として連盟の役員にひっぱり出され、当時稽古を始めたばかりの私は、その下請けのような形で、事務的なことをやらざるを得なかったからである。

やはり、あの時代でも、若い

人はあまり能・謡曲に関心がなく、辛うじて大学に能楽研究部が存在し、横浜では、横浜市大に、観世と宝生を中心に部活動が行われていたくらいであった。私はたまたま高校時代から稽古をしていたので、入学後間もなく能楽研究部に参加した。同期の井田勝秀君が大変熱心で、大学のすぐ側に居住されていた木村鉄治先生をお願いし、10名前後で活動を始めた。私は当時、既に高橋進先生についていたので、助言者の立場でこの部活動に協力し、大学祭等で謡曲や仕舞を上演するのに参加した。

今思うと、あの時代によくあれだけのメンバーが集ったものだ。宝生と観世を合わせると、数十名の仲間が集まり盛況であった。今日では能楽研究部は消滅して影も形もなくなり、OB会のみ盛んである。一回だけ、現役の連中に火をつけようと、大学祭の時に大講堂を舞台にして両流のOBで半日、謡曲と仕舞を懸命に試みたが、観客はかなりあったもののほとんど外来者ばかりで、現役の学生諸君には見向きもされないという情けない結果に終わった。

以来、横浜市大では能楽研究部は復活しないまま今日に至っている。まことに残念至極しか言いようがないが、何かよいきっかけでもない限り、難しいことだと思ふ。

若い人たちに謡曲の稽古を始めさせることはますます難しくなっているのではないだろうか。各流同じような状況におかれていたことは間違いない。私も年齢的に限界が来ており、もう火つけ役というわけにはいかないが、このまま放置されれば継者がいなくなり、稽古人口は減少の一途を辿ることになるだろう。せつなく、横浜には立派な能楽堂が出来たのだから、これを活用し、各流がこぞつて後継者作りに努力すべきであろう。わが身を振り返って、これだけはどうも成功しなかった(宝生としても随分努力したが)が、あきらめずにトライすることが望まれる。

~~~~~

私の謡事始

観世流 園田 義雄

謡に接したのは、横浜能楽堂で「みんなで謡う『高砂』」の第1回の募集に応募した時である。喜多流出雲康雅氏の指導のもと、1月に参加者全員による発表会が行なわれた。氏の随筆と写真が掲載された新聞を会社員の役員に見せ、小生もワンノブゼムであることを強調したものだ。その後、横浜能楽堂の「初めての謡仕舞教室」の募集には一回目、二回目と応募するも残念賞、その後更に申込み、ようやく参加を許された。

謡の詞章を理解すればするほど、掛詞、縁語、枕詞、序詞、係語などの巧みさに感嘆すると共に、日本語そのものの美しさのめり込んでしまった。又読み込むほどに、昔古典で学んだ内容がようやく理解できるようになったのは、正に謡を習った御蔭である(遅すぎたかな!)。謡を習ったことで、旅の楽しみも増えた。長生殿は適わぬとしても、五條大橋に始まり、小督縁の場所を訪ねたりした。神戸出張の折は、用件を片付けた後、1人西に向い、青葉の笛を訪ね、須磨付近を一日歩き回った。阪神淡路大震災の8年後であったが、一の谷ではまだキズ跡が生々しく残っており、自然の恐ろしさを、肌で感じたものであった。

旧跡を訪ねた折、「謡曲史跡保存会」の案内板を見つけ、謡曲の縁の地である説明を読むと、今まで何気なく見ていた土地が急に身近に感じられたりする。も、関心があればこそであろう。時には、ここは謡に出てくる場所だから、案内板にはどんな説明がされているのだろうと期待してみるも、全然見つけれなくて、1人がっかりすることもあるのだが。

能楽は、文楽、歌舞伎と共に、ユネスコの世界無形文化遺産に登録されている素晴らしい日本の伝統文化である。自然を愛す

のと同様、文化も後世に残したいものである。

「謡い継がれていく謡のように」

~~~~~

### 『景清』のこと

観世流梅若会 菊田 博

平成23年1月、歌舞伎界では例の市川海老蔵の不祥事件から急遽坂東玉三郎による「阿古屋」が上演され話題になった。これは人形浄瑠璃「壇浦兜軍記」の中の三段目「堀川問注所」といい、その歌舞伎版である。平家の滅亡後、悪七兵衛景清は東大寺大仏殿再興の落慶式で頼朝暗殺を企てたが失敗し逃走した。鎌倉方の畠山重忠は景清の愛人である阿古屋が行方を知っているかどうかを探るため、琴・三味線・胡弓の三曲を弾かせ、その音色にすこしも乱れのないことから彼女の無実を知り釈放させる。阿古屋の三曲の演奏が眼目で、歌舞伎では阿古屋に扮する女形のたしなみが発揮される。

能楽の世界では「大仏供養」(金春流では奈良詣)と「景清」がある。前者は奈良東大寺落慶供養で源頼朝の命を狙う話であり、又後者は日向の国に流された景清が訪ねて来た娘の人丸にかつての武勇を語る話である。歌舞伎に見る阿古屋なる人物は何を根拠としているのだろうか。能の出典は平家物語だとされて

能の出典は平家物語だとされているが、その平家物語にしても景清が颯爽と登場するのは、八島の合戦における三穂の屋の十郎との鏖引き（巻十一弓流し）

だけであつて、あとは他の武将と一緒に名前が出るだけである。（日本古典文学大系、岩波書店）

「壇浦兜軍記」の基になった作品は同じく人形浄瑠璃で近松門左衛門作の「出世景清」である。更にその典拠となったものは「幸若舞」の景清（平凡社東洋文庫「幸若舞2」）である。「幸若舞」では景清の馴染みの遊女として清水坂に住む「阿古王」が登場し、景清を訴え出て、終には鎌倉方に殺されてしまう。一方「出世景清」では名前を「阿古屋」に変えて褒賞欲しさに景清の密訴を唆す兄との間で悩み、景清の妻からの文を見て逆上して訴人してしまい、あげく自ら命を絶つ女として描いている。

ここで「幸若舞」と「能」のどちらが先かが問題になるが、能の景清は世阿弥の作ともいわれている事から、やはり能の方が先に出来たものと考えられる。又これらの典拠となった平家物語は、語り本系、読み本系と種々の異本があり、頼朝を狙う事、遊女の事、清水観音の身代わりの話も別の人物の事件があるという。「幸若舞」はこれら平家の残党の行動を集約して、

唯一平家の侍として華々しく描かれていて、景清の武勇談に絡めて複合的人物としてまとめられたものと思われる。

### 遊行上人太空の博愛

金春流 飯島 端治

#### (3) 敵御方供養塔

藤沢市西富の遊行寺境内、東門付近に「敵御方供養塔」（別称「怨親平等の碑」。国指定史跡）と呼ばれる石塔が建っています。この供養塔は、太空遊行中の応永二十三年（一四一六）、前任の関東管領の上杉禪秀が、鎌倉公方の足利持氏に対して起こした叛乱（上杉禪秀の乱）で犠牲となった人や馬を、敵味方の区別無く供養して、戦乱が甦生した日から数えて、ちょうど三年目にあたる応永二十五年十月六日に建てられました。

乱は、禪秀が持氏の悪政を諫めたことなどから両者の間に不和が生じ、それが原因となつて起こつたと言われます。初めは禪秀方が優位に立ち、持氏は鎌倉を追われ駿河に逃れましたが、結局は、室町幕府の支援を受けた持氏側の勝利に終わり、禪秀は鎌倉で自刃しました。

乱がおさまって間もない二十四年四月頃、太空は遊行を終えて藤沢に帰山し、藤沢上人に就任しています。従つて供養塔の

建立に太空が関わっていることは、ほぼ間違いないと考えられます。供養塔には、次のような意味の碑文が刻まれています。

兵乱により、在々所々で、敵御方が、箭（矢）や刀、水・火のために命を落とした。その人畜（人馬）の亡魂（靈魂）が、皆ことごとく浄土へ往生するようこの塔婆を建てた。塔の前では、僧も俗（僧でない人）も十念（南無阿弥陀仏を十回称えること）なすべきものである。

碑文は、兵乱の犠牲となつた敵・御（味）方の靈魂を、①敵味方なく、しかも②人畜の区別なく平等に供養すると、供養塔建立の趣旨を述べ、僧俗共皆、塔の前で十念を称えるよう呼びかけています。正に、慈悲と博愛精神満ち溢れる碑文と言えると思います。

#### むすび

以上二つの事例に見られるように、謡曲『実盛』に登場する遊行上人太空は、博愛精神に富む慈悲深い人であつたように思われます。作者世阿弥は、太空のこのような人柄に感銘して、実盛の靈魂と太空との深い心の交流をテーマとして、この作品を作つたのではないのでしょうか。言わば『実盛』は、太空なくしては存在しえなかつた作品であると思います。

#### 【参考文献】

『藤沢市史』第四卷（藤沢市役所）、『増補大日本地名辞書』第五卷（富山房）ほか



遊行寺境内「敵御方供養塔」

#### 私の謡事始め

喜多流 松永 次郎

三十一歳の時、誘つてくれたのが同業者の三世同志であつたという気安さもあつて、銀座の裏通りにあつた華、茶道師匠のお宅の2階へ。階段の上がりがまちに腰を下ろした時、聞こえてきたのが内田安信師三十二歳の声。綺麗で迫力のある大きな素晴らしい声、これを耳にした途端「俺、

帰らせてもらうよ、こんな声を出すなんて出来ない！」これが謡に接した時の第一声です。「そんな事言わないで、折角来たのだから今日だけでも」と止められ、稽古を受ける事に。それから2人で稽古場に通つていました。3・4ヶ月を過ぎる頃にはいつの間にか相棒が来なくなり、やがて休みと言う事に「2階に無理やり上げて梯子を外した！」と毒突いても詮無い事でした。

能楽が、世界に誇る素晴らしい伝統芸能の一つであるという程度の知識しか持ち合わせていなかった男が、何でやつてみようと思つたのか、自分にとつても不思議な事をしたと思つておりますが、一つ思いつく理由らしき事は、その頃の私は親の仕事を継いで八年目、やつと仕事にも慣れ自分なりに余裕らしきものが出来たという事と、生まれ育ちは東京京橋、仕事場は八丁堀という下町でその頃の下町では、商店、工場の大小を問わず、親父さん達が至極当たり前の様に、余技（遊び）を心にかけていて、自分の仕事とは全く違つた芸事に勤しむ姿を多数見ていたので、それが普通の事と思ひ、自分も何か出来ることがあるやつてよいのではと漠然と考えていた事でしょう。今から考えれば深く考えもせず、ふらつと付いて行つてしまつたのだらうと思います。

氣になつています事は愛好者の減少です。私が初めて入会させて頂いた会は、7・8名で入れ替わりがあつても常時同数位の会員を有しておりましたが、ご多分に漏れず、1人減り、1人亡くなり壊滅状態です。これを何とかしたいと、同級生、友人から知り合い、知り合いの知り合いと声を掛けますが、最近では能自体から解説しなくてはならなくなりました。これで

は増やすと言う事は無理な事です。

かつて先代宗家故喜多実師は長い間、「学生能」と称して学校に話を持ち掛け、能楽堂にて解説と演能を生徒達に見せることに熱心に取り組まれたと聞いております。

又現在横浜能楽堂や久良岐能舞台も能楽愛好者を増やす為の企画、講座等を積極的に開かれている事に敬服致しております。参加をなさった人々の中から百人の内一人でも、いや千人の内一人でも能楽に興味を持って下さる方が出ることを期待して止みません。

~~~~~  
合縁奇縁でつながる絆
——耀々会の仲間たちのこと——

金剛流 高木 緑

熊谷先生が日の出町に構えておられる「金剛流久良岐稽古舞台」では、お2人の先生による2クラス編成で、それぞれ個人またはグループ単位による通常稽古や、特別編成の合同稽古などが、常時スケジュールいっばいに行われている。

各グループには愛称があり、「耀々会」というのは、真知子先生クラスの中の、私が一員となっているグループ名である。その構成は、久良岐能舞台教室での偶然の出会い以来の3人と、

他の先生のもとから移籍された1人で、平均年齢は70才前半の女性4人、謡と仕舞の稽古暦は若干異なるが、いずれも10年前後程度。そして心ばせは、少々控え目でいて、早朝稽古でも定刻に参集し、殆ど全員皆勤の真面目人間揃いである。

グループ稽古するのは謡だけであるが、先生の模範の謡に続いて一通り同吟、それから役を当てて謡う。又発表会で連吟する時は、役を輪番かジャンケンで決めるのが通例のこと。記憶力減退・表現不足を託しながらも至って和やかな雰囲気である。

ところで肝心の「耀々会」命名の由来は、というと、「謡」と同音の「耀」を2つ重ねた「耀々」は、「光り輝く様子の意」とあるのを辞書で探しあてた私が「音の響きのよさが気に入ったのと、この二文字に、皆がいつでも、いつまでも生き生き輝いているように、との思いをこめたい」と提案し、会員の賛同が得られて決まった次第。

グループに名がついてからの事であるが、全員の苗字の中に共通して木があった、いや木が揃っている、という大発見があった。

当初メンバーで目下休会中の1人は板、在籍の4人は林・枚・松・木である。これこそ合縁奇縁と驚いたが、「どうりで

気も揃う筈だ」と妙に納得して大喜びもしたものだ。

偶然の出会いから始まったお付き合いが、こうして今や気の合った者同士の心安い仲と思えるようになったのは、当然の成り行きにしても、本当に嬉しい限り、有難い限りである。

わが耀々会の面々4人は、日頃損得勘定ぬきで懇ろに指導をして下さる両熊谷先生のご熱意にお応え出来るような十八番を持てるようになったら——などと、気持ちばかりは先行するものの、未だに見果てぬ夢物語を語り合いつつ、この夏も揃って元気に日之出町通いに精を出している。

能楽堂だより

二十四年九月以降の公演案内

二十四年度、九月一月の横浜能楽堂の公演予定は、次のとおりです。このほか毎月第二日曜日に「横浜能楽堂普及公演——横浜狂言堂——」を開催いたします。

第二十九回

横浜かもんやま能

十一月二十四日(土)

午後三時開演

能楽師による実技と解説

金子敬一郎 笠井賢一
狂言「伯母ケ酒」

能「雷電 替装束」
(大蔵流) 茂山あきら

S席四千元、A席三千五百円、
B席三千元
チケット発売日
九月二十九日(土) 正午から
(初日は電話・Webのみ)

企画公演

「美の世阿弥 華の信光」

第一回 九月二十九日(土)

第一部 午後一時開演

解説 小田幸子

(明治学院大学講師)
能「山姥」(観世流) 梅若玄祥

第二部 午後四時半開演

能「皇帝」(観世流) 梅若玄祥

第二回 十一月三日(土・祝)

第一部 午後一時開演

解説 西野春雄

(法政大学名誉教授)
能「砦」(観世流) 浅見真州

第二部 午後四時半開演

能「玉井 貝尽」

(観世流) 浅見真州

第三回 十一月十二日(土)

第一部 午後一時開演

解説 天野文雄

(大阪大学名誉教授)
能「清経 恋之音取」

(観世流) 大槻文蔵
第二部 午後四時半開演
復曲能「巴園」

(観世流) 大槻文蔵
通し券(第一部・第二部)
S席九千元、A席八千元、
B席七千元

単独券/S席五千元、
A席四千五百円、B席四千元
チケット発売中

《編集後記》

△第60回横浜能が平成24年6月2日(土)横浜能楽堂で開催され、能(邯鄲・金春)狂言(末広・大蔵)をはじめ素謡(翁・喜多)仕舞(三笑・観世)一調(笠之段・梅若)独吟(熊野・金剛)舞囃子(融・宝生)などが上演された。当日は天候にも恵まれ、大勢の能楽愛好者においでいただき、大成功裡に終えることが出来た。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。
△「幽玄第43号」まで編集委員を勤めて頂いていた観世流佐野友宥及び喜多流伊藤博、両氏が退かれた。
△新たに「幽玄44号」からは観世流鈴木幸江及び喜多流栗野稔、両氏に編集委員をお願いすることとなった。